

保育者養成における身体表現（1）

田辺圭子

（北陸学院短期大学）

（はじめに）

保育現場からは「子ども達の創造性を育てるための動きの表現はどのようにしたらいいのか。」「保育者の援助はどのようにしたらいいのか。」など、身体表現活動に対する疑問や悩みの声が聞こえる。養成校で身体運動全般を担当する者として、現場における身体表現活動を知ることは重要であり、身体表現に関する実態調査として保育現場全体にアンケート調査することは可能である。しかし、その前に研究者自身が保育者と身体表現活動を通して保育者の身体表現を知ると同時に、場と時間を共有することで互いに相手の存在を認めることができた状態で、現場での身体表現活動について調べる必要があるのではないかと考えた。幸い、北陸学院短期大学幼児児童教育研究所 夏期講習会「からだで表現」の場に身体表現活動に疑問や悩みを持っている保育者に集まってもらうことが可能となり、身体表現をいっしょに体験した後、保育現場現場で行っている表現活動についてアンケートを行うことができたのでその結果を報告したい。

（研究の目的）

保育現場で行われている表現活動に疑問や悩みを持っている保育者の現場での身体表現活動を把握することを目的とする。

（研究方法）

北陸学院短期大学幼児児童教育研究所 夏期講習会「からだで表現」参加した女性保育者 11 名に対して実技を行い、全員に保育現場での身体表現活動に関するアンケートを行った。

夏期講習会は当初 8 月に行われる予定であったが、台風の接近により 10 月に日時を変更して行った。

アンケートの内容は、受講者に関する質問として、①年齢、②保育経験年数について。保育現場での身体表現活動に関する質問として、③受講者の身体表現に対する好き嫌い、④保育の中での身体表現活動、⑤身体表現活動に対する疑問点とした。

（結果と考察）

アンケートにより以下のような結果が得られた。

（1）受講者について

①年齢は全員 20 代であった。

②保育経験年数は表 1 の通りであった。

（2）受講者と保育現場での身体表現活動について

③受講者の身体表現に対する好き嫌いについては表 2 のような結果であった。受講者全員が身体表現を「好き」と答えているが、1 名のみ空欄に「身体で表現したり動いたりする事は好きだが、自由に動くとなるとやや苦手。」との記述があった。

④保育の中での身体表現活動の有無については表 3 の通りであり、保育に取り入れていない理由は「0 歳児であるため。」「夜間保育のため静的な活動が主になるため。」であった。未満児や夜間保育など身体表現の指導法を考える上で保育形態や保育内容をも考慮しなければならないのではなかとと思われる。

表 4～表 8 は保育に身体表現活動を取り入れている受講者 8 名のより具体的な様子を把握するため質問から得られた結果であり、回答は自由記述とした。表 4 より、北陸地方において屋内の活動を考えることは重要であり、身体表現活動をその中の一つの活動として位置付けていることが伺われるが、活動が系統づけられて行われているかについては今後調査を進める必要があるように思われる。具体的な活動は表 5 の通りであり、子どもが動きをイメージするものや具体的な動きの提示による活動、音や音楽からの刺激による活動ではないかと考えられる。表 6 より、園または保育者によって活動の割合に差があるようであるが、その要因が何によるものであるかについては今後の課題としたい。表 7 より、多くの子どもが「楽しんでいる」ようであるが、「参加しない子」もクラスの中では見受けられ、保育者の気になる存在のようである。表 8 より、子ども達の好きな身体表現活動は「ジャンプ」「歩伏前進」「四つん這い」「ゴロゴロ」「トンネルくぐり」のような具体的な動きと「身体を思い切り動かせるもの」「速い動き」「鬼ごっこ形式のもの」のように具体的な動きに課題が加えられたもの、「飛行機、電車」「動物」のように実際の動きをイメージしながら動くものと「どんぐりなど身近にあるもの」「ストーリーがあるもの」のようにイメージを動きに置き換えるもの、「強い動物」「ヒーロー」のように具体的

な動きのイメージに「強い」という印象を動きで表現するもの、「アンパンマン体操」のように決まった動きを音楽に合わせて踊る楽しさを味わうもの、に分類できるようである。

⑤身体表現活動でわからないことや疑問については表9の通りである。自由記述による回答としたが、「いろいろなことをしたいができることが限られているので悩んでいる」のような内容に関する悩みと「導入、進め方」「子どもの気持ちののせかた」のような活動の進め方であり、どのような活動をどのようにすればよいのかを悩んでいるといえよう。また、「いつも参加しない子どもへ援助」「1、2歳児の身体表現」のような具体的な事例や対象者への指導法。「楽器、音楽」のような身体以外の表現を促す要素への取り組み方法。「いつ活動すればよいか」のような活動のための場の設定への悩みであった。

(結論)

アンケートの結果から、保育形態や保育内容により身体表現活動を行いにくい場合があることが明らかとなった。また、身体表現活動を行っている保育者の回答から、身体表現を屋内活動として取り入れているが、活動の割合には差があることが明らかとなった。

具体的な身体表現活動と子ども達の好きな身体表現活動とに共通するものは、「子どもが動きをイメージするもの。」「具体的な動きによる活動。」「音・音楽からの刺激による活動。」であり、子ども達の好きな身体表現活動だけに見られたのは「具体的な動きに課題が加えられたもの。」「具体的な動きよりも「強い」という印象を表現するもの。』であった。具体的な身体表現活動よりも子ども達の好きな身体表現活動の方が多くの記述を得られたことから、子どもを主体とすることで、より詳細な身体表現を調べやすいことが考えられた。

身体表現活動に対する疑問や悩みは、「どのようなことをどのようにすればよいのか。」と「具体的な事例や対象者への指導法」、「身体以外の表現を促す要素への取り組み方法」「活動のための場の設定」であり、疑問や悩みに答えられるような研究への取り組みの必要性が考えられる。

保育者の自由記述による回答には、「リズム」(表3)「タンバリン」「リトミック」「ダンス」「ピアノ」(表4)「アンパンマン体操」(表7)「楽器、音楽」(表8)など、音や音楽を示す言葉が随所に見られ、保育現場における身体表現を考える上では重要な要素である

と考えられた。

(おわりに)

日時を変更して行ったため、当初の予定よりも参加者が少なく、調査数として十分な数を得られなかったが、今回の結果を今後の研究の基礎的資料として活用していきたい。

表1 保育経験年数

1年	6名(54.5%)
3年	1名(9%)
4年	3名(27.3%)
9年	1名(9%)

表2 身体表現活動の好き、嫌い

好き	11名(100%)
嫌い	0名(0%)

表3 保育の中に身体表現活動を取り入れていらっしゃいますか

はい	8名(73%)
いいえ	3名(27%)

表4 どのような時に行われますか

天気が良くないとき	4名(50%)
リズム遊びの中に取り入れて	2名(25%)
身体表現活動として	2名(25%)

表5 どのような活動を行われますか

動物になりきる	4名(50%)
タンバリンに合わせて歩いたり走ったりジャンプする	3名(37.5%)
リトミック	2名(25%)
ダンス	2名(25%)
ピアノに合わせて子どもの知っているものになりきる	1名(12.5%)

表6 どのくらいの割合で活動されますか

毎日	1名(12.5%)
1週間に1~2回	1名(12.5%)
1週間に3~4回	3名(37.5%)
1ヶ月に2~3回	1名(12.5%)
1ヶ月に1回	2名(25%)

表7 子ども達の反応はいかがですか

とてもよい、楽しんでいる	4名(50%)
楽しんでいる子どももいるが参加しない子もいる	4名(50%)

表8 子ども達の好きな身体表現活動はありますか

ジャンプ	2名(25%)
強い動物	1名(12.5%)
ヒーロー	1名(12.5%)
身体を思い切り動かせるもの	1名(12.5%)
速い動き	1名(12.5%)
鬼ごっこ形式のもの	1名(12.5%)
歩伏前進	1名(12.5%)
四つん這い	1名(12.5%)
ゴロゴロ	1名(12.5%)
トンネルくぐり	1名(12.5%)
飛行機、電車	1名(12.5%)
動物	1名(12.5%)
どんぐりなど身近なもの	1名(12.5%)
ストーリーのあるもの	1名(12.5%)
アンパンマン体操	1名(12.5%)

表9 身体表現活動でわからないことや疑問について

いろいろなことをしたいができることが限られている	3名(27.2%)
いつも参加しない子どもへの援助	3名(27.2%)
導入、進め方	3名(27.2%)
1、2歳児の身体表現	2名(18.1%)
楽器、音楽	2名(18.1%)
子どもの気持ちののせかた	2名(18.1%)
いつ活動すればよいか	1名(9%)